

今朝も真白いフェリーが入港して来た。赤い喫水線が大きく浮き上がっている。今日は積荷が軽いのだろう。狭い神戸港の西ゲートに向ってユックリ進んで来る。突堤の先の煙突にはまだ灯がともっている。九州からの夜行便だろう。定刻 7 時 5 分前 キッカリの到着である。昨夜の海は穏やかだったに違いない。

照明を落としたフェリーのブリッジでは、キャプテン、パイラー、ステアラーなどが前方を見つめて、時々短い命令を交わしている。船首と船尾のデッキでは、ロープ係の船員が先に小玉のついた細い縄をグルグル廻しながら岸壁へ投げるタイミングを待っている。ブリッジから左右に張り出したデッキには若いサード・オフィサーが笛を口にして船員がロープを投げる頃合いを見計らっている。

ブリッジの緊迫した場面とは異なり、船内の通路は下船する乗客が大きな荷物を手に右往左往している。その間を潜りぬけながら、客室係の乗務員が客の誘導に声を嗄らしている。定期客船入港の何時もの変わらぬ風景である。

港に面した病院の窓から私は毎朝この光景を眺めている。少し離れた病院の 5 階の窓から眺めているに過ぎない。ここから静かに進むフェリーのブリッジの様子が見えるハズは無い、また船内の物音が聞こえる訳でもない、若い頃から馴れ親しんだ「港の情景」が網膜の裏を通り過ぎて行くだけである。

私がまだ神戸大学の学生だった頃（1953～）神戸港には「港族」と自称する学生達が居た。暇さえあれば「港」のアチコチで時間を潰していた。大きな外国の客船や軍艦が入港したら、飛んで見に行く学生達である。人数は多いが、これ等はまだまだ初心の者であ

る。一方突堤の端の鉄のビット（太いロープをかける鉄の杭）に腰を下ろしボケーと出入りの船を眺めて半日を過ごす者も居た。これはかなり重症の部類である。色々なタイプの「港族」の学生が居た。人はサマザマというが、彼らに共通する点は「神戸港」について誰もが“すごく詳しい”と言うことであった。しかしそれぞれに「好みの分野、、、専門学部」があった。やはり根は学生達である。

少数ではあるが「港のマリー」の研究に熱心な者が居た。「港のマリー」、、、言うまでもなく、外国貨物船乗務員相手の「夜の蝶」達の事である。またバイト先の保税倉庫の詰所に住み込んで、ここから大学に通う者も居た。この男は“深夜の港の事情”に馬鹿に詳しかった。

私は一度「港のマリー」の学生研究者に連れられて、その探訪に出かけたことがある。メリケン波止場の突堤の灯の下に、点々と港のマリーさん達が佇んでいた。薄暗くて良くな見えないが、かなり派手なドレスを着ていた。「メリケン波止場」と言うと、淡谷のり子の歌でよく知られているが、港のタクシー・ボートの乗り場である。

フレイター、、、貨物船の多くは、港内のブイへの繋留か防波堤の外の沖止りである。これ等の船員を波止場へ送り迎えする小さなランチ、、、タクシー・ボートの発着場を「メリケン波止場」と言う。横浜も神戸も同じ機能の突堤が有り、呼び名も同じらしい。神戸港内で一番短い突堤だったと思うが、一番賑わう所でもあった。昼間は近くのビル街からサラリーマン達が休憩時間のプラプラ歩きにやってくる。お天気の良い日には持参の弁当を広げている者も少なくなかった。

バイトを兼ねて港の倉庫に住み着いた男、、、、Mr.O は四国出身の同期生であった。保税倉庫周辺は、まだ通関を済ませていない輸入品が沢山積み上げられて、高い塀や柵で囲われていた。外国である夜の倉庫は気持ちが悪いと思うが、彼は会社から何かあると一目散に逃げる様に指示されていた。賊に刃向ってケガでもされると荷主は大きな損害を負担する事になる。「賊の侵入の事実」さえ証言できれば、お役目達成である。あとは保険会社の仕事、番人は逃げるが「勝」である。私はしばしば彼の詰所に押しかけて、安酒を酌み交わし語り明かした。徹夜で「書生論」を戦わせるには格好の場所であった。何せ周辺は「人っ子一人いない、、、治外法権、、、“外国”」であった。

「港のマリー研究者」の夜の探訪にもお供したことがある。「メリケン波止場」の街灯の下にマリーさん達は佇んでいる。暗くてよく見えないが、皆かなり派手なドレスを着ている。当時としてはやや珍しかった、ロングスカートだった。日が落ち始めると、沖からマドロス達がやってきて「波止場」は賑やかになる。いよいよマリーさん達の出番である。しかしよく見ると、マリーさん達はだれかかれかまわずに、やたら声を掛けるのではない、それぞれ馴染があるらしい。久々の出会いを喜び合う場面が微笑ましい。マドロス達は「コウベのマリー」との出会いを楽しみに、長い波路をやってきたのだろう、、、年に何度の出会いがあるのだろうか?、、、、フランス映画の一場面を見ている様な気がする。港のこのスポットを研究分野に選んだ男〈学生〉が居るのも理解できる。新開地あたりの路地裏で「ち

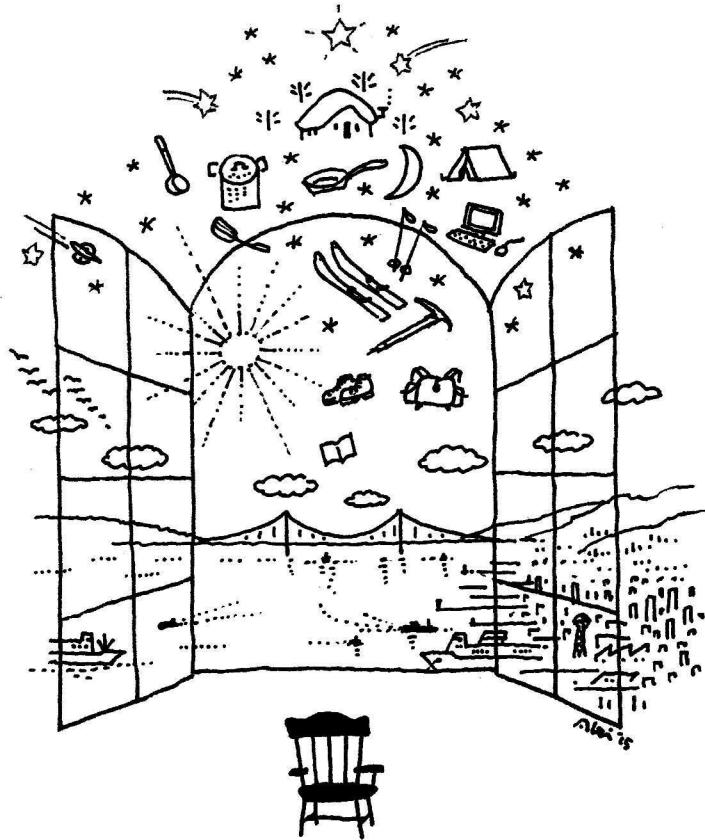
よつとお兄さん」と声を掛けてくる場面とは異なる。フランス語のカタコトくらいは話せないとこの取材も研究もかなわぬ世界であった。腕に錨の刺青を彫ったマドロス達は仲間とコウベのマリーと連れ立って、お国ナマリは違っていても賑やかに三宮の方へ消えていった。

友人のMは港の税関に勤めながら神戸大学の第二課程（夜間）に通っていた。先の倉庫番のO君もY君も山岳部の仲間だった。M君は「税関の制服」のお陰で入港中の外国船にはフリー・パスで出入りした。私は彼のお尻について、よく外国客船の内部の見学を行った。当時は客船といつても定期航路は アメリカのプレジデント・ライントンくらいだけだった。この航路はアメリカが変事に際して大量の兵員をアジア方面に派遣出切る様に太平洋上に常に 大型船を浮かべておくと言う軍事目的のための国策航路であった。客船とはいえ豪華とは云いがたく、スリムでスマートな船体が特徴であり、特にスピードに勝れていた。「いざ鎌倉」形の船である。プレジデント・ウイルソン号、クリーブランド号などの船内を見学した。プレジデント・ウイルソン号には皇太子（現天皇）がアメリカ留学の際、乗船されたと記憶している。大型航空機が登場して、大陸間の大量人員輸送が“海から空”に置き換えられる“前夜”的話である。実は私がこの「港族」の指導を受けたのは山岳部OB（旧制最後）の梶原良彦さんだった。私の港への興味は「出船、入船の光景」で有名客船の入・出港の新聞記事を見つけると、講義をサボって神戸港の「ヨントツ」、第4突堤へ出かけた。当時「ヨントツ」と呼ばれた 第4突堤が大型客船の発着場と決められていた。現在はポートライナー駅がその役割を担当しているようだ。大型豪華客船の出発の日には「ヨントツ」に出かけて、出航風景を見物した。

当時世界一周の豪華客船といつても戦後まだ日の浅い神戸港では誰一人見送る人が居るわけではない、乗船客達は神戸で過ごした数日を思い出しながら、疎らな突堤の人達に手振ったり、テープを投げたりするだけである。それでも有名船の場合は、新聞記事などのおかげでそこそこの人が集って、少しは賑やかな風景になる。しかし送迎の双方に「知り合いの人達」が居るわけではない、ただ出航の風景を楽しんでいるにすぎない。

その一群の中にはキャプテンやパーサーなどの高級船員を見送りに来たドレス姿も少し見られた。いわゆる “Kobe Mistress” の連中である。船首の少し離れた所に固まっていた。船尾の方には一般船員相手の「港のマリー」達が集っている。朝から派手なドレス姿がケバケバしい。

この様な場面で私はデッキの中から「これはと思う者」を見つけて、これに集中して熱心に手を振ったり、声をかけたりして反応をまった。お互にかなり離れた所に居るが、こう言う事は心が通じる様である。向こうも「何だろう、、、？」と気付いて、指を差し出したり、手を振ったりし始める。廻りの人達にも「あれは何だろう、、、？」と声を掛け合っている様だ。私の方も、廻りの人達に「あの人を皆で見送ってやろう」と呼びかけると、元々暇な連中だから「これは面白い、、、」と盛んに手を振り始める。向こうも私達の方に向ってテープを投げて来たりする。客船出航の一角に、旧知の人達の「涙、涙の船出のお別れ、、、」



と言う場面が出現する。船の上段のデッキの人達も「何だ？何だ？」と覗き込んだりする。ただそれだけの事である。時間が来て船はどこか、、、つぎの目的地に向かって神戸港の東ゲートから 一声の汽笛を残して出て行く。私の呼びかけに応じてくれた連中は「今日は面白かった、、、」と言ってくれる。ただボンヤリと出航を見るだけではなく、アクション入りと言うところが良かったのだろう。

先客の方も何もわからない内に「心暖まる見送り」をうけて、神戸に良い想い出を残しているのかもしれない。旅を終えて帰国後の土産話に必ず付け加えているだろう。「誰だか良く判らないが、この高価なパールネックレスを買った神戸の宝石店の店員達に違いない」と自慢の真珠を披露する、毎度のセリフになっているかも知れない。神戸にとって悪い話ではない。

港はやはり“出船・入船”的光景が良い。入船、、、入港には喜びを伴う場合が多い。一方出船は哀愁を伴う。哀しみの世界である。その代表は「移民船の出航」だろう。私もご縁があって見送りに立ち会った事がある、ブラジル丸であった。これも「ヨントツ」から出航した。「神戸港は雨だった」に始まる「蒼氓〈そうぼう〉」(石川達三)の世界である。移民船の出航については、神戸に住む者として、何か書き残しておきたいと思う。しかしこれは稿を改める必要がある。

今回は“渋谷のり子”のムードで終わる事にする。